於期五斤四兩略○中　右月料、小月減卅分之一、

年料

若狹國(中略○中略)於已　右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿擬供御、

〔倭名類聚抄十七海菜〕大凝菜　本朝式云、凝海藻、古留毛波、俗用心太二字、云古々呂布止、楊氏漢語抄云、大凝菜、

〔箋注倭名類聚抄九藻〕本居氏曰、凝訓古留、或云古呂、淤能碁呂島、自凝之義、心訓古々呂者、古呂古呂之省、凝凝也、故以肝向爲心之枕詞、肝向言臓腑相集對也、○略中　閩書云、石花菜生海礁上、性寒、夏月煮之成凍、本草綱目、石花菜生南海砂石間、高二三寸、狀如珊瑚、有紅白二色、枝上有細齒、以沸湯泡去砂屑、沃以薑醋、食之甚脆、久浸化成膠凍也、

石花菜

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、○略中　東山蕪、西山心太、

〔庭訓往來諸抄大成扶翼〕貞○伊勢貞丈　云、西山は山にて海なし、心太は海草なり、山に生ずべき理なし、然れども心太を他所より求て、それを煎じて、こゝろぶとに作て出す、佳品なる故名物とするなり、

〔七十一番歌合〕七十一番　右　心太うり

うらぼんのなかばの秋のよもすがら月にすますや我心てい

右はうらぼんのよもすがら、心ぶとうること云かり、心ていきく心地す、

〔南留別志一〕二職人歌合に、太凝菜を賣る人の、こゝろていとよぶといふ事あり、それより又とこころてんとなれるなり、

〔東雅十三菜蔬〕海髮イギス○略中　イギスの義不詳、ゴルモは卽凝海藻也、コゝロブトとは、コゝロは凝也、フトは太也、卽大凝菜也、今も俗に凝をいひてコゝルなどいふ也、

〔本朝食鑑三水菜〕凝海藻　古訓古古呂布止、今訓登古呂天、